

北陸電力圏を築いた山田昌作

山田昌作は、1890年（明治23）生まれ、幼少期は旧富山藩士で1879年（明治12）に創業した富山第二百三十三国立銀行（1897年（明治30）に十二銀行に改称）の大阪支店長となった父信昌について大阪に居住。1914年（大正3）に東京帝国大学（現、国立大学法人東京大学）法学部独法を卒業すると、父の命に従って故郷に戻り、中学校の講師として法政経済とドイツ語を教えていました。

1916年（大正5）、金岡又左衛門^{しょうへい}に招聘され富山電気の常務取締役として入社。以後、衆議院議員を務める金岡の片腕として同社の経営に携りました。1929年（昭和4）に日本海電気（旧富山電気、1928年（昭和3）に改称）の社長に就任すると、豊富な電力を求めて進出する大都市の電力資本に対抗するため、地元電力会社を統合して経営地盤を強化する一方、重化学工業をはじめ紡績など多業種の大規模工場を誘致して北陸に電力市場を創出しました。

第二次世界大戦下、政府が電気事業の国家管理を発表すると、毅然と北陸の特殊性、自立性を主張。「地域エゴ」と誹謗されながらも政府に働きかけ、他方で地元北陸の電気事業者に自主統合を呼びかけて北陸合同電気（後に北陸配電に継承）を設立、北陸電力圏の独立を認めさせました。

戦後、北陸電力の初代社長に就任。逼迫する電力不足を解決するため、他社に先駆けて電源開発に奔走。なかでも常願寺川有峰発電計画は、その規模も総工事費も社運を賭けた大規模開発でした。山田は有峰ダム completion の見届け、1963年（昭和38）にその生涯を終えました。



山田昌作



北陸電力
アーカイブギャラリー

Hokuriku Electric Power Company 地域への思い
ARCHIVE GALLERY